

氏名	山本 樹
ヨミガナ	ヤマモト イツキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第617号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 暖炉上のエンブレム－16世紀後期ボローニャにおけるカラッチ一族の室内装飾研究
	〈作品〉
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（論文第1副査）			（）	
（作品第1副査）			（）	
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	名古屋大学大学院	教授	（人文学研究科）	栗田 秀法
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文は、16世紀後期ボローニャで活動した画家一族カラッチ（ルドヴィコ〔1555-1619〕、アゴスティーノ〔1557-1602〕、アンニーバレ〔1560-1609〕）の暖炉上絵画群を考察対象とする。従来、カラッチ一族がボローニャで手がけた居室装飾は、パラッツォ・ファヴヴァ（1584年）とパラッツォ・マニャーニ（1591-92年）の作品群を中心に語られる傾向にあり、暖炉上絵画群については踏み込んだ考察はほとんど行われてこなかった。カラッチ一族の暖炉上絵画群は、18世紀中期に版画家のカルロ・アントニオ・ピサリによってその模刻版画が集成された。ピサリの報告によれば市内の邸宅10軒に計19点の暖炉上絵画が所蔵されていたとされる。本論文はそのうち8点を論述の中心として、カラッチ一族による暖炉上絵画群の体系的理解を目指したものである。

まず序章において、暖炉上絵画の成立要件を歴史的観点から検討した。一般に、暖炉上という特定の区画に描かれた絵画は火のモチーフを組み込むことを慣例とし、16世紀後期には居室装飾の一ジャンルとして成立していた。そこには時にラテン語のモットー（銘文）が添えられ、委嘱主のアイデンティティと結びついた表象体系が形成されていたと考えられる。

続く第1章から第5章は、個別の作品研究に充てられる。第1章では、近年パラッツォ・ラッタにて再発見されたルドヴィコの作品《トロイアから脱出するアエネアース》を取り上げ、地母神キュベレーの神官、コリュバンテスによるクレウサの拉致という珍しい描写が、セルウィウスによる『アエネアース』註解に基づくものであること、また火災の跡地に建てられたという邸宅の造営経緯が、燃えるトロイアからの〈脱出〉と新たな土地での〈建国〉という英雄アエネアースの冒険に重ねられている可能性を指摘した。

第2章では、ルッキーニ家のために制作された2点の作品《アレクサンドロス大王とタイス》および《ディードーの死》について、文献上の典拠と主題解釈に関する考察をおこなった。ルドヴィコとアンニーバレは、火のモチーフを共通の枠組みとして、誘惑に成功した女と失敗した女とを対比的・教訓的に示すプロ

グラムを構想したと考えられる。

第3章では、カーザ・サンピエーリ＝タロンに残る6点の作品群について、一貫したプログラムを読み取ることを試みた。天井画の3点が、第3室から第1室へ向かって至高天へと上昇してゆくのに対し、暖炉上の3点は地下（冥府）へと降りてゆく。カラッチ一族はこの段階的な構造を、フリーズ装飾のような連続した画面ではなく、各々独立した区画の異なる主題によって構成している。これは後年のガレリア・ファルネーゼで取られたクアドリ・リポルターティの形式を予告するものであると言える。

第4章では、画家達の叔父カルロ・カラッチのために制作された《ヘラクレスとヒュドラ》を取り上げた。同主題の一般的なイコノグラフィとは違い、本作のヘラクレスの姿は頬杖を突いて思考状態にあり、憂鬱な表情を見せている。これはエラスムスやアルチャーティを起点とするルネサンスの人文主義的文脈において、ヘラクレスが〈雄弁〉の象徴とされていたことから理解しうる。ルドヴィコが作品を捧げたカルロ・カラッチは、1580年代後半から1594年にかけて、ボローニャのシンボルであるサン・ペトロニオ聖堂のヴォールト高をめぐる議論に都市政府の代表として参加していた。暖炉上絵画のヘラクレスには、学者としての叔父の姿が重ねられている。作品は叔父への労いの意と、教皇派に対するボローニャ都市政府側の「勝利」への賛美が込められたものであったと解釈できる。

第5章では、カプラーラ家のために制作された《力と節制の寓意》について、『イコノロギア』を参照しながらそのイコノグラフィを捉え直した。図像全体は、右側の〈力〉が火を剣で突いて盛り上げる一方、左側の〈節制〉が水を注ぐことで火の大きさが調整された状態を表している。カプラーラ家はセナトーレに選出された家系であり、ルドヴィコの暖炉上絵画には、教皇庁と都市政府による共同統治体制の理想が極めて観念的に表されていると結論づけられる。

5点の暖炉上絵画群には、カラッチ一族が1580年代後半から1603年の間に、物語（ナラティブ）と寓意（アレゴリー）の間で様々な表現を試みていた軌跡が読み取られる。アンニーバレが後年、ローマでのパトロンであるファルネーゼ家のために個人のエンブレムをより直接的に組み込んだ神話画を制作していることを考えると、これら一連の暖炉上絵画群はその重要な前段階であると言える。カラッチ一族の居室装飾の展開に暖炉上絵画群を位置付けることで、ボローニャにおけるカラッチ一族の活動が、ローマでの成果へと繋がってゆくことがよりいっそう明確に理解されるのである。

#### （総合審査結果の要旨）

本論文は、イタリアの初期バロック様式の成立に重要な役割を果たしたボローニャの画家一族、カラッチ派の初期活動を対象とした研究である。ルドヴィコ（1555-1619）、アゴスティーノ（1557-1602）、アンニーバレ（1560-1609）の3人の画家たちは、初期にはしばしば共同で制作にたずさわり、頑健な自然主義の様式によって、イタリア絵画に新たな潮流を生み出していった。本論文は、1580年代から1600年代初頭にいたる時期の、彼らの初期に属する制作活動のうち、ボローニャのいくつかの有力家門のために描かれた室内装飾絵画、とりわけ暖炉上を飾る一連の作品に関する研究である。

これらの作品は、現在でも個人宅に所蔵されていたり、制作後に他の場所に移設されたりしたケースがほとんどで、保存状態もあまり良好でない場合が多い。そうした理由もあって、これらの絵画群はカラッチ一族の初期活動における重要な活動分野であったにもかかわらず、これまで詳細な研究の対象となつてこなかった。筆者はこうした装飾絵画のうち現存する8件の作例を中心に、主として図像学的観点から詳細に検討し、従来明らかになつていなかった作品の意味内容や図像典拠の特定、注文の契機や同時代の背景などの解明を行なった。

本論文は、序章および1～5章の、計6章で構成されている。まず序章においては、貴族宅の暖炉上の装飾という絵画カテゴリーを歴史的に検討し、カラッチ派の貢献に先立つ先例や、同時代における認識について論じている。さらに、こうした作品に特徴的に採用される主題的傾向、すなわち「火」のモチーフや地下世界に関連するテーマが選択される傾向についても、同時代の文献に基づいて確認されている。

以降は、各章がそれぞれひとつの作品（群）にあてられ、個々に設定された論点について検討がなされている。第一章では、ルドヴィコ・カラッチの作品《トロイアから脱出するアエネアース》を論じ、同作品

に描かれた場面を詳細に観察した結果、構図の一部に見られる拉致される女性の表現が、ウェルギリウスの原作テキストではなく、4世紀末の文法学者による註解書に由来することを明らかにした。続く第二章では、ルドヴィコとアンニーバレによる2点の作品、《アレクサンドロス大王とタイス》および《ディードーの死》について論じ、古代史の女性を主題とするこれらの作品の典拠と主題解釈について検討している。

第三章は、ボローニャのサンピエーリ邸に描かれた3点の暖炉上絵画（および関連して構想された3点の天井画）にあてられている。これらの装飾画は、ルドヴィコ、アゴスティーノ、アンニーバレの3人が分担して制作したものと考えられる。筆者は、これまで明確にされてこなかったこれらの作品相互の意味上の関連を検討し、全体としてのプログラムを、美德と悪徳の対比をいわば段階的に提示したものとして読み解いた。この見解は、同連作に関する有効な新知見として評価できるであろう。

第四章では、壁から剥がされて、現在ではロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に所蔵される《ヘラクレスとヒュドラ》を取り上げている。この作品は劣悪な保存状態ゆえに常設で展示されておらず、研究史においてもこれまで注目度の低かったものであるが、ルドヴィコ・カラッチが叔父にあたるカルロ・カラッチの家のために制作した、本来は質の高い作品である。筆者はここに描かれたヘラクレスを、メランコリーと休息のポーズから解釈し、新たな知見として、カルロ・カラッチの当時の知的関心・活動の焦点であったサン・ペトロニオ聖堂の改築問題と関連付けて論じている。この見解は、暖炉上の絵画表象、をいわば注文主の知的エンブレムとしてとらえた、非常に興味深い解釈といえる。

最後の第五章では、やはりルドヴィコによって描かれた《力と節制の寓意》が論じられる。この作品は、中央で燃え盛る炎の両側に、それぞれ水を注ぐ女性と剣を振りかざす女性を配した寓意的構図を示している。筆者は同時代の寓意図像集等の関連資料をていねいに検討し、この独特な構図が、火の過剰な勢威や衰滅をとともに防ぎ、中庸の状態を維持するという意味で読み取り得ることを、説得的に論証した。さらに筆者はこの火を、おそらくボローニャの政治的動静を暗示するものと推測している。

以上のように本論文は、これまで体系的に論じられることのなかったカラッチ一族の暖炉上装飾画という興味深いカテゴリーの作品群を取り上げて詳細な考察を加えることで、イタリア初期バロック絵画研究に有効な寄与を行なったものとして評価できる。筆者は2年間の留学期間を有効に活用し、個人邸に所蔵される作品など、アクセスしにくい作品の調査も積極的に実施し、貴重な成果を上げることができた。また、およそ20年間にわたるカラッチ一族の初期活動をたどることで、彼らの室内装飾画の主題が、単純な物語的なアプローチから、徐々に寓意性・象徴性を重視した知的なアプローチに幅を広げていくプロセスを同定することができた。このような画家たちの主題構想における成熟が、少し後にアンニーバレとアゴスティーノによるローマでの重要な制作活動に活かされていく、という視座が得られた点も、本論文の成果といえよう。

一方、ややもの足りない点と感じられるのは、本論文が対象とした暖炉上絵画群の分析が、カラッチ派の制作活動に関する従来の研究内容と、どのように関連付けられ、どのような新知見をもたらし得るのかが、もうひとつ明確には論述されていない点であるように思われる。本論文は、カラッチ一族に関する過去の研究から相対的に看過されてきた領域に取り組んだ優れた成果として十分に評価できる内容であるが、本論文の成果をカラッチ一族の作品研究全般に適切にフィードバックし、新たな総合的理解を目指すことを今後の方向性として期待したい。